

【5 解読文】 速水堅曹履歴拔萃自記（明治三年：一八七〇）〈B〉

（表紙）

「速水堅曹

履歴拔萃

甲号 自記」

【明治三年庚午 年三十二歳】

十月廿二日、東京出立、帰路白子ニ泊ル、然ルニ外務

〈十月二十二日、東京出立（しゅったつ）、帰路白子に泊まる、然（しか）るに外務〉

省ヨリ呼出飛脚来、引返セト、又引返スニ不レ及

〈省より呼び出し飛脚来たり、引き返せと、又引き返すに及ばず〉

ト両度申来ル、同廿五日帰国ス、製糸場金^{（カ）}

〈と両度申し来る、同二十五日帰国す、製糸場金〉

ノ切迫ニ甚困ス、藩ニテカヲ入レス、予大ニ尽力ス

〈の切迫に甚（はなは）だ困す、藩にて力を入れず、予（よ）大いに尽力す〉

十月十九日、民部省ヨリノ達ニ抛リ富岡二行、

〈十月十九日、民部省よりの達しに抛り富岡に行き、〉

地理権頭杉浦讓、尾高庶務小佑并外

〈地理権頭（ごんのかみ）杉浦讓、尾高庶務小佑（しょうすけ）並びに外〉

人ブリユナ氏ニ面談、新建製糸場ノ利害

〈人ブリユナ氏に面談、新建製糸場の利害〉

ヲ論ス、尾高上手ノ言アリ、同廿日出立、夕

〈を論ず、尾高上手の言あり、同二十日出立、夕〉

觀民ニ歸ル、是富岡ノ地理見分ナリ

〈觀民に歸る、是（これ）富岡の地理見分なり〉

十月廿八日、富岡工出張ノ役々来ル、予応

〈十月二十八日、富岡へ出張の役々来る、予応〉

接ス

〈接す〉

十一月三日、予自大属ト称セリ、他人問ハ、如何

〈十一月三日、予自ら大属（だいぞく）と称せり、他人問はば如何（いかに）〉

ト大参事ニ問、参事曰、権大属試補ト云

〈と大参事に問う、参事曰（いわ）く、権（ごん）大属試補と言う〉

可シトナリ
へべしとなりへ

十一月四日、御用ニテ出府、此度ハ生糸ノ尽力ト
へ十一月四日、御用にて出府、此の度は生糸の尽力とへ

齋藤ヲ擯斥スルトノ公用ナリ、齋藤ノ狡
へ齋藤を擯斥（ひんせき）するとの公用なり、齋藤のへ

猾、藩ノ力ヲ以挫ク能ハサレハナリ、同五日着京
へ狡猾（こうかつ）、藩の力を以（もつ）て挫（くじ）く能（あた）わざれ
ばなり、同五日着京へ

十一月七日、大蔵省ニテ生糸ノ建白、聞届ニ成ラス
へ十一月七日、大蔵省にて生糸の建白、聞き届けに成らずへ

付箋有り、生糸ノ書ニ記ス、猶屢大蔵省
へ付箋有り、生糸の書に記す、猶屢（しばしば）大蔵省へ

二迫ル
へに迫（せま）るへ

十一月十日立、横浜ニ行、十三日帰京ス
へ十一月十日立つ、横浜に行く、十三日帰京すへ

同月廿日、有栖川家ノ臣藤井ニ逢フ
へ同月二十日、有栖川家の臣藤井に逢うへ

十二月朔日、築地瑞西岡士館ニテ生糸ノ談判
へ十二月朔日、築地瑞西（スイス）岡士館にて生糸の談判へ

ヲ成ス、金ハ外人ヨリ出スト云
へを成す、金は外人より出すと云うへ

同月十七日、通商司工生糸ノ建白ヲ成ス
へ同月十七日、通商司へ生糸の建白を成すへ

同月十九日、予、民部省工撰挙ノ内意アリ、
へ同月十九日、予、民部省へ撰挙の内意ありへ

辞ス
へ辞すへ

同月廿二日出立、同廿四日帰宅ス
へ同月二十二日出立、同二十四日帰宅すへ